

いざ、苔寺へ

藤原 道夫

桂離宮のことを書きながら庭園について調べてみると、苔寺こと西芳寺が池泉回遊式庭園の原型となっていることを知った。訪ねてみたいと思うものの、ここは敷居が高い。先ず、拝観するために往復ハガキで申し込み、許可証を得なければならない。また、場所が京都市南西の郊外にあって交通の便がよくない。あれこれ考えあぐねていたが、京都の紅葉が見頃になる頃に修学院離宮の参観許可が得られたのをきっかけに、苔寺に半日割く覚悟ができ、ようやく「いざ行かん」という気分になって拝観願いの往復ハガキを出した。9月中頃のことだった。間もなく希望日に拝観を許可する旨の返信ハガキが届いた。

指定された11月18日の午後1時少し前に門前に着いた。すでに十数人が待っている。定刻に門が開く。中に入って返信ハガキの拝観許可証を提示して3千円払うと、「先ずは本堂へ」という案内。本堂に上がると写経用の紙と説明書が渡された。廊下にテーブルと椅子が並べられている。係の僧が言うには「先ず写経をし、気分を落ち着かせてから庭園を見てまわりましょう」。写経には気乗りせず、あまり下手だと係から指導されるかもしれない、あるいはやり直しになるかもしれない、などと雑念が浮かぶ。ところが、写経は持ち帰ってもよいと聞いて一安心。こっそりボールペンを使ってもよいですかと訊ねると、大丈夫とのこと。持参した細筆は使わず、薄く印刷された経文（延命十句観音経）を意味など考えることもなくボールペンでなぞる。気分はひたすら庭園の方に向かっている。

一番早く仕上げて出口へ。立っていた若い僧に庭園の回り方を訊ねると、穏やかな表情で「時間がありましたら二度回るとよいでしょう。紅葉が見頃ですし、苔の上に落ちる木漏れ日が時間とともに変わって新しい発見があるかもしれません」とのこと。この言葉ですっかり落ち着いた気分になった。

庭園に入るや、見事な紅葉に出会う。これを眺めてからゆっくり庭園を回る。園内には大小の木々が立ち並び、地面は苔の絨毯におおわれている。所々に紅葉が見られ、明るい日差しを受けて赤く輝いている。複雑な形状の池の周りに沿路がととのえられ、場所によって桂離宮の延段のように大小の色のある自然石が敷かれている。沿路にゆるい高低があり、また曲がりくねっているので先が見通せない。作庭の妙か？ 茶室様の建物が3棟あるなかで、2棟はとても粗末だ。池に大きな島があり、小高いところに祠が見える。一回りしてから、逆方向にまた一回りした。庭の規模は小さく、10分で一回りできるくらい。 （続く）

苔の上の落ち葉を掃いている僧に出あい、話しかけてみた。落ち葉を除かないと苔が弱ってしまう、よく手入れをすれば苔は年中ほとんど変わらず緑を保つとか。苔寺といわれるだけあって苔の緑が美しく、木漏れ日がまだら模様を作っているのも新鮮な風景だ。小さな掘割があり、水の流れの脇に生えている苔のみずみずしいさが印象的だった。

説明書によると、この庭園は 14 世紀末に夢想疎石によってととのえられた。これが池泉回遊式庭園の原型となったのだ。茶室も設けられており、当時の人たちは池のある庭の景色を眺めながらお茶も楽しんだのであろう。庭に苔が定着しはじめたのは 18 世紀になってかららしい。以後、「苔寺」として知られるようになった。今や、天龍寺の庭園とならんで世界文化遺産となり、国指定の特別名勝史跡となっている。庭の景観が荒らされないようにと、大分前から入場者を制限する現在の拝観様式をとっている。

敷居が高いと思われた苔寺だったが、いざ来て見ると若い僧侶の対応が丁寧だし、何分にも混雑することなく静かに見学できたのがよかった。また新緑の季節に訪ねてみたい。その折には写経も筆を使ってしっかり行い、経文も味わうことにしよう。